

接触場面における自発的発話の開始表現の考察 —日本語非母語話者の使用状況を中心に—

An examination of the opening expressions phrases of spontaneous utterances in contact situations: focusing on the usage among non-native speakers of Japanese

鄒 曉依(千葉大学 人文社会科学研究科)

Xiaoyi ZOU (Chiba University,
Graduate School of Social Sciences and Humanities)

Abstract

In this paper, I analyzed the phrases which are used by non-native speakers, when they try to begin the spontaneous utterance. From the examination, I can understand that the repetition 'nanka nanka' and the conjunction 'demo' are the effective way to start utterance. Then, the 'e' which is used for asking questions and the 'hai' which is only used by non-native speakers are observed as a part of way to begin utterance.

1. はじめに

接触場面の会話において、非母語話者は相手に質問される時は比較的スムーズに発話を開始できるが、自ら発話を開始する場合、すなわち自発的な発話の場合になると、発話開始に何らかの不安や言語問題を感じたりすることがあるようである。特に、どのように発話を開始し、その際に、どのような発話開始表現を使えばいいのかといった開始表現の使用に困難を感じる人が多いようである。初鹿野(1997)は、接触場面における非母語話者の話者交替時の問題について、不適切な表現を過剰に使用したり、逆に何も使用しないため物足りない感じになったり、話者交替時に不自然な印象を与えたりすることがあると指摘している。

本研究は、非母語話者が自発的な発話を開始するにあたってどのようにして発話を開始するのか、その際に、どのような開始表現を使用しているかを調査・分析し、接触場面の発話開始における言語表現及びその機能を明らかにするための第一歩としたい。

2. 先行研究

初鹿野(1997)は、会話参加者の相互行為の観点から、ターン(turn)を交替する際に現れる言語行動を発話ターン交替のテクニックと呼んでいる。初鹿野(1997)では、議論場面とインタビュー場面を調査し、発話ターン交替の際に、①ディスコース・マーカ―(主に「だから」「あ」「いや」「じゃあ」など)、②指示詞、③呼称、④いきなり発話する、⑤あいづちを使用するという5つのテクニックが使用されていることを指摘している。また、これらのテクニックを使うことで、ターンの順番をコントロールしたり、ターンを取るという相手への妨害と考えられる行為を和らげたり、人間関係を円滑にする機能を果たすことができると述べている。

また、永田(2004)は日本語母語話者が自分の発話を開始するための方法として、あいづちを使っていることを挙げている。あいづちは自ら談話の展開をコントロールする積極的な側面を持ち、特に反復

型のあいづちが打たれた後にはターンが移行する割合が大きくなることを指摘している(永田 2004).

一方、非母語話者の発話権の取得に関する調査からは、日本語初級学習者の場合、他者選択による発話開始が圧倒的に多いが、上級になるにつれ、自主的にターンを取る傾向が高くなることが指摘されている(木暮 2002). さらに、日本語母語話者と比較した吉本(2006)では、日本語母語話者の場合、発話権交替を行う際のあいづちの利用率は69%を占めるのに対し、日本語学習者は58%と比較的に低いとしている.

以上、発話開始に関する先行研究を見てみたが、これまでの研究では、発話を開始させるテクニックとして「ディスコース・マーカ」や「あいづち」などが使用されていることは指摘されているものの、具体的にどのような開始表現が使用され、特に非母語話者の場合、発話開始をめぐるどのような言語問題に直面しているかを調査した研究は少ない. 本研究では非母語話者が自発的な発話においてどのような開始表現を用い、どのように発話開始を行っているかを調査・分析する.

3. 調査の概要

本研究では、非母語話者の発話開始を調べるため、ビデオカメラとICレコーダを使い4人の初対面の接触場面会話を収録した. その際、会話内容は限定せず、会話参加者が自由に展開できるよう設定した. 調査協力者となった日本語非母語話者は、日本の大学の学部や大学院に在籍しており、日本語の能力は全員上級レベルの話者である. 会話のペアを組む際には、会話の参加者が共通話題を探しやすいよう、できるだけ同じ所属や学年の人をペアにした. 会話はそれぞれ20分程度収録し、その後文字化し、後日フォローアップ・インタビューを行った.

表1: 調査協力者のプロフィール

	参加者	年齢	性別	国籍	職業	日本語能力	滞日期間
会話1	J1	20代	女	日本	大学生4年		
	C1	20代	女	中国	大学生4年	上級	6年
会話2	J2	20代	女	日本	修士1年		
	C2	20代	男	中国	修士2年	上級	3年半
会話3	J3	20代	女	日本	大学生4年		
	K3	20代	女	韓国	大学生3年	上級	4年
会話4	J4	20代	女	日本	修士1年		
	C4	20代	女	中国	修士1年	上級	2年半

4. 分析の枠組み

本研究では、木暮(2002)の分類を参考に、「相手からターンをもらう」(他者選択)を除き、「自らターンを取る」(自己選択)と、「現在の話者が引き続き話し続ける」(交替なし)の二つのターン取得の種類を「自発的な発話」とする. ターンを取得しようとする際に、話者は何らかの言葉で自分が発話したいと

いう意志を表明しようとする。よく見られるものは「え」「あ」「でも」「だから」「あの」「ええと」などがある。このような自発的な発話を開始する際に現れたターンの取得に関わる表現を「自発的な発話の開始表現」とする。

「発話の開始表現」には、「言いよどみ表現」「感嘆詞」「接続詞」などのディスコース・マーカーとしてのものや、「指示詞」、「名前と呼称」、「あいづち詞」などが挙げられている。本研究では、初鹿野(1997)の分類を参考に、非母語話者の接触場面の自発的な発話における開始表現を取り上げていく。

5. 結果と考察

今回の調査では、全部で 9 種類の自発的な発話の開始表現が観察できた。具体的には初鹿野(1997)で指摘された「言いよどみ表現」、「感嘆詞」、「接続詞」、「指示詞」、「人称詞」、「あいづち詞」による開始表現を始め、「いいな」、「いやだ(な)」、「すごい」のような「感情形容詞」を使った表現、「たぶん」、「もう」などの程度を表す「副詞」を使って先行発話に関連付けて発話を開始する表現形式が観察された。さらに、上記の表現の 2 種類以上からなる形式も多く見られており、本研究ではこれらを「複合タイプ」とし、開始表現の一つの種類として数えた。以下では、今回見られた 9 種類の開始表現の中で、特に使用が多かった「言いよどみ表現」、「感嘆詞」、「接続詞」、「あいづち詞」の開始表現を中心に、その具体的な表現形式と機能の考察を試みる。

5.1 言いよどみ表現(フィラー)を使った発話開始表現

言いよどみ表現が発話の順番を取得するための手段の一つであることは、すでに先行研究などで指摘されている。本研究の調査においても、非母語話者が発話の順番を取るため、様々な言いよどみ表現を頻繁に使用していることが確認できた。具体的には、「あのう」、「ええと」、「うーん」などの言いよどみ表現の使用が見られたが、非母語話者はこれらの表現を使うことによって、相手にこれから話すための内容を考えていること、そして、それと同時にターンを取得して発話を開始したいことを示そうとしていたと考えられる。中でも多く見られたのは、「なんか」という表現である。さらに、その反復型である「なんかなんか」の表現で発話を開始する場合もあり、以下はその例である。

例 1: C1 による「なんかなんか」の使用例

226 C1: 日本は疲れる, みんな友達が<笑い>

227 J1: えー

228 C1: なんかなんかー, (うんうん)知っている留学生の友達の, (はい)残業とか言って(後略)

例 1 は C1 が日本で働くのが大変で疲れることについて話している場面である。C1 の発話に対し、J1 は発話 227 で「えー」と驚きを示しており、J1 のその発話を受け、C1 は「なんかなんか」と早口で強い口調で「なんかなんか」と繰り返しながら、発話を開始している。C1 の発話開始に対し、J1 はすぐに「うんうん」とあいづちを打ちながら、C1 が発話する順番になることを認め、ターンを譲渡している。この例からは、C1 が「なんかなんか」の反復型の開始表現を使うことで、速やかにターンを取ることに成功し、話者交替を実現させていることが分かる。永田(2004)では反復型のあいづちを打った後にターンが移行する割合が大きくなることを指摘しているが、C1 の場合、反復型の言いよどみ表現を使うことによって、「話したい内容がある」ことを相手に示し、話者交替を容易にさせようとしていたと考えられる。もし、そう

であるならば、「なんかなんか」の反復型の開始表現には、「時間稼ぎ」や「間を埋める」機能を持つ単独型の「なんか」と違い、話したい内容があることを示し、話者交替を促す機能があると考えられる。

5.2 感嘆詞を使った発話開始表現

発話開始には先行する発話内容に対し、まずは驚きや感動、賛成などの何らかの感情を示した後、自分の発話を開始することが多い。本調査でも様々な感嘆詞を使った発話開始が観察された。具体的には、先行する発話に対し、「ああ」で理解を表明しながら発話を開始する例、「まあ」で相手の発話に軽く同意を示しながら発話を開始する例、「いやあ」という否定表現を使い開始する例、「え」「えー」「あ」「へー」などの感動や驚きを示す表現を使いながら発話を開始する例が見られた。中には、一例だけではあるが、「ほら」という表現を使い相手の注意を喚起し、発話を開始する例も見られた。

感嘆詞を使った開始表現の中でも特に多く見られたのは、「え」の感嘆詞を使った開始である。「え」はこれまで疑問や共有を表す表現として、内容を確認するために使うと指摘されてきたが、本調査では、非母語話者が質問の開始において「え」という表現を頻繁に使っていることが分かった。次の例 2 は、J3 は発話 121 で「韓国に行ってみたい」と話しており、K3 は J3 の発話を受け、「え」という表現で発話を開始し、続けて J3 の予定について質問をしている。このような「え」からの質問の開始は、母語話者にもよく見られる開始の形で、先行する相手の発話に対する軽い感嘆と、突然質問を始める際の唐突感を和らげ、発話を円滑に進めたいという意図によるものであると考えられる。

例 2: K3 による「え」の使用例

121 J3: いいですね、や行ってみたいですけど

122 K3: え、いつごろ行く予定ですか？

5.3 接続詞を使った発話開始表現

接続詞は発話間の関係を示すのによく使われる。今回の調査でも、「でも」を使いこれから反対意見を述べることを表明し発話を開始する例、「だから」を使って因果関係を示して発話を開始する例、「だって」を使い付加条件を加えることを示し発話を開始する例、「あと」を使い追加情報があることを示し発話を開始する例が観察された。

以下では、接続詞の使用の中、非母語話者がよく使用していると言われている「でも」の使用について見ていく。非母語話者には、主に「あー、でも」「うん、でも」「そうそうそう、え、でも」のような複合タイプの使用が多く、先に短い表現を使って同意や賛成の意を示すことで、「でも」がもたらす否定の意を和らげる使い方をすることが多い。さらに、「でも」は反対意見を述べる時だけではなく、話題を変える時や、ターンを取る時にも使われている。

次の例 3 は「でも」を使って発話したい意志を相手に示すことで、発話を開始する例である。J1 は発話 213 で「海外へ行きたいけど機会がない」と話しているが、それに対して C1 は発話 214 で「でも」を使って相手のターンを終了させ、自分が話者となって「留学する機会がいっぱいある」と反対意見を述べている。このように、C1 は「でも」を使うことで相手の発話を中断させ、ターンを取ることに成功していることから、「でも」という表現は反対意見を述べる際の標識であるため、話者の発話意欲を強く表明することができ、話者交替を実現させるのに有効な手段であると言える。

例 3: C1 による「でも」の使用例

213 J1: いや、行きたくないはないが、機会がないし、なんか、〈あんまり〉

214 C1: 〈でも〉、あなんか、いっぱいあるんじゃない、大学の中、なんかこの(あー)海外留学ガイダンスとかいっぱいあるんじゃない

5.4 あいづち詞を使った発話開始表現

相手の発話に対してあいづちを打つことでターンを取り、自分の発話を開始することが日本語の会話には多く見られる。今回の調査で、発話開始に使用されたあいづち詞は、「はい」「うん」「そう」「そうですね」「そうですか」「なるほど」があり、中でも相手の発話について反応やコメントを述べることで、自分の発話を開始しているのが多数観察された。特に非母語話者の場合、母語話者の使用には見られないあいづちの「はい」による発話開始が多く見られ、興味深い。

次の例 4 は、C2 が自分の専門について説明している場面である。J2 が発話 95 のように「うーん」と言い、C2 の発話を理解したことを示している。C2 は J2 の発話を受け発話 96 で「はい」とあいづちを打ちながら、その後具体的な説明へと発話を進めている。一般的に「はい」を文頭で使う場合、相手の質問に対する返事であることが多い。しかし、例 4 では、「はい」をあいづちとして使い、まずは相手の発話に対する軽い反応を示し、続けて具体的な説明を始めたいという非母語話者の発話開始の意図が伺える。

例 4: C2 による「はい」の使用例

94 C2: お金になる一とは限らないですけども

95 J2: うーん

96 C2: はい、例えば、まあ、どうやって、ま環境にいいか、どうや、どういう制度があったら(後略)

6. まとめ

本稿では、接触場面における非母語話者の自発的な発話に見られる発話開始表現について考察した。全部で9種類の開始表現が観察できたが、今回はその中の4種類「言いよどみ表現」、「感嘆詞」、「接続詞」、「あいづち詞」を取り上げて分析した。それぞれの中で特徴的なのは「言いよどみ表現」の「なんかなんか」という「なんか」の反復型、「接続詞」の「でも」、質問文の前によく表れる「感嘆詞」の「え」で、これらの表現を使うことで、発話したい意志を相手に伝えることで発話を開始している。特に、反復型と単独に使用される「でも」は話者の発話意欲を強く表現できることから、話者交替を容易にするための表現であると考えられる。また、今回の調査では、非母語話者に特有なものとして「はい」というあいづち詞を使った発話開始表現も見られた。しかし、実際の言語生活の中で使用されている開始表現は他にも多くあると考えられるため、本稿で述べた9種類はその一部に過ぎない。今後さらに調査を行い、自発的な発話を開始する際の言語表現を考察していきたい。

参考文献

- 初鹿野阿れ。(1998). “発話ターン交代のテクニック—相手の発話中に自発的にターンを始める場合—”. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集. pp.147-162. 東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 堀口純子.(1997). 日本語教育と会話分析. くろしお出版.

- 木暮律子. (2002). “母語場面と接触場面の会話における話者交替—話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得”. *言語と文化*. 第3号. pp. 163- 180. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- 永田良太. (2004). “会話におけるあいづちの機能—発話途中に打たれるあいづちに注目して”. *日本語教育*. 120号. pp.53-62. 日本語教育学会.
- 吉本優子. (2006). “発話権交替時における発話機能について—日本語母語話者お日本語学習者の談話資料から”. *京都精華大学紀要*. 31号. pp.65-74. 京都精華大学.